# 『冷徹上官の不機嫌な歪愛』

●ウェルナー隊長
・識別番号ＦＶ－０９（所属部隊victor）
・身長189
・年齢29

五年前に前線基地『フロント』に配属されたＶシリーズの〝戦闘機〟（ドローン機のパイロット）。
基地建設の護衛任務に当たった『０』ナンバーで唯一生き残っている。
脳とリンクした自機が撃墜されたときに脳に過剰不可がかかるドローンパイロットは、その多くが致命的な脳障害によって二年足らずで退官するが、ウェルナーは長期にわたって運用されている。
自他とも認めるエースだが人間性は最悪であり、無能な人間が何より嫌い。そのくせ自分以外を全員無能だと思っている。
形ばかりは敬語のていをとっているが、出てくる言葉のほとんどは罵声と嫌味と皮肉。
常にイライラしており、抵抗できない獲物を嬲り、いたぶることを娯楽としている。
長期的なパートナーとなることが前提の〝調整機〟とすら長続きせず、ここ一年ほどは調整機なしで任務をこなしてきたが、定期健診でレッドアラートが出たため急遽「使い捨て」の調整機が投入された。
長持ちしてるだけで本人も使い捨て。その自覚もある。
ヒロインに対しても「どうせ最初のメンテナンスでねをあげると」と思っていたが、意外にも滞りなく仕事が遂行されて驚いている。
嫌味や罵声や嫌がらせに対して、その瞬間は確かにダメージが出ている感触があるのに、後日顔を合わせるとケロリとしていてやや不気味に思っている。
ヒロインが担当になってから幻聴と幻覚がおさまり、安眠できるようになって戦績が上がった。
ヒロインについては「自分の所有物として及第点」くらいの気持ちだが、ウェルナーがこの気持ちになっている人間は現状ヒロインのみである。
関係が終わる瞬間だけ少し優しくなるが、関係が継続すると決まった瞬間からまたあたりが強くなるタイプ。

●コール
識別番号ＦＲ－４３（所属部隊 rearguard）
後方支援部隊であるＲシリーズの第四補充人員の３番。
前線基地『フロント』における情報管理を担っており、補充人員に訓練生時代の旧友を見つけてヒロインに声をかける。
気さくで明るく元気でいいやつ。
正義感が強く、少々短慮。故に致命的。
ヒロインに対して恋愛感情はないが、ウェルナーから救ってやらねばと思っている。余計なお世話。

●ヒロイン
識別番号ＦＣ－２７（所属部隊 cunae）
戦闘で高ぶった〝戦闘機〟の脳をリラックスさせ、メンテナンスすることを任務とする〝調整機〟。
戦闘機と精神的に深くつながることを前提とした役職であるため、識別番号以外のすべての情報は入隊と同時に抹消され、以降秘匿されている。
『フロント』に配属されたＣシリーズの二七番目。
ウェルナーと色々な意味で相性が完全に合致している。

●『フロント』
レアメタルの採掘場の利権をめぐり、隣国と小競り合いを続けていた地域に５年前に建設された前線基地。
その建設を妨害する隣国の防波堤となったのがＶ－０シリーズの戦闘機たちである。
日系企業が噛んでるので識別コードは日本語読み。

## トラック1　同調

基地に着任し、上官であるウェルナーの自室に挨拶に出向くヒロイン。
居住区画に人影はほぼなく、静まり返った廊下でマイク越しに来室を告げたヒロインを、ソファくつろいでいたウェルナーが迎え入れる。

【1　マイク越し】
ウ「識別番号FC・ニ・ナナ。入室を許可します」

【スライドドアが開き、入室するヒロイン】

SE：スライドドア開く
SE：ヒロインの足音数歩

【9】
ウ「【ため息】これはこれは……
　随分と有能そうな人材があてがわれたものですね。
　不安げなまなざしに、緊張した息遣い。
　今まであなたが調整機として担当してきた
　戦闘機の不憫を思うと、哀れみで背筋が凍る」

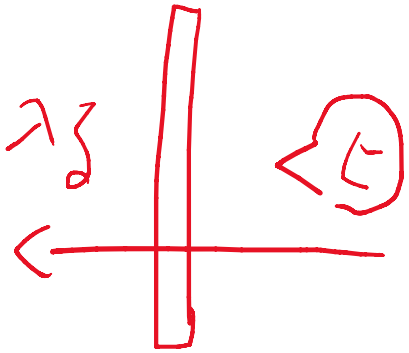
【ヒロイン「これが初任務です」】

ウ「初任務？　【舌打ち】よもや訓練生上がりとは……
　上層部もよほど人材不足のようだ。それか、私への嫌がらせか」

ウ「役にも立たない新人を送り付けてくるくらいなら、
　今まで通り調整機なしで仕事を続けたほうがマシだというのに」

【ヒロイン「調整機なしで、仕事をしていらしたんですか？」】

ウ「ええ。一年前に前任の調整機が逃げ出して以来、
　今日まで調整機によるメンテナンスを
　受けずにやってきましたが……」




ウ

SE：ソファから立ち上がる

【9】

ウ「【立ち上がりながら】先日、脳波のチェックで
レッドアラートが出て、急遽〝誰でもいいから〟と
呼ばれたのがあなたです」

ウ「【ヒロインに歩み寄りながら】検査官は、
次の瞬間にでも私が発狂し、基地を爆撃すると思っているらしい。」

SE：ゆっくりとした足音

【ウェルナー、ヒロインの正面で立ち止まり、威圧的に見下ろす】

【1】

ウ「訓練生上がりの赤ん坊に、私のように優秀な
戦闘機の調整がまともに務まるとは思えませんが…
手順は分かってるんでしょうね？」

【ヒロイン、うなずく】

SE：頷く衣擦れ

ウ「いいでしょう。では、頭をこちらへ」

【ウェルナー、ヒロインの頭をつかんで引き寄せる】

SE：抱き寄せる衣擦れ

【3　耳元】

ウ「どんな気分です？
会ったばかりの男に、こうして抱き寄せられるのは。
この状態で、お互いのセキュリティの一番
深いところまで晒し合うのだから、
多くの調整機と戦闘機が恋仲になるのもうなずける」

【3　耳元】

ウ「だからといって、思い上がらないことです。
あなたは私にとって、脳にたまったゴミを
処理させるための感情のゴミ箱にすぎない」

【ヒロイン「どうしてそんな言い方を？」】

ウ「不快にさせましたか？
撤回してほしければ、せいぜい私を納得させる仕事をするんですね。
では、仕事ぶりを見せていただきましょうか」

ウ「識別番号ＦＶ-ゼロ・キュウ　ウェルナー、
識別番号ＦＣ・ニー・ナナのアクセスを許可します」

ＳＥ：ここに心音とか何らかの緊張感を表すＳＥ：を入れたほうがいいか悩む。入れるなら少しずつ音を緩やかにしていく表現ができるけど……難しい気もする

ウ「私に呼吸を合わせて、感じるといい。
私の脳を支配する、怒りと憎悪と苛立ちを」

ウ「初めて戦闘機とシンクロする調整機は、
その苦痛に耐えられずに失神することも
あるというじゃないですか。
あなたはどうです？　最後まで立っていられますか？」

ウ「ほら、苦しくなってきた。
心拍数が上がり、呼吸が浅く、短くなる。
瞳孔が開き、涙があふれ、正体のわからない苦痛に
頭の中をかき回される」

【3　耳元】
ウ「苦しいでしょう？　私を突き飛ばして逃げ出したいはずだ。
あぁ――かなり深く繋がりましたね。
今、私がケガをすればあなたも同じ痛みを味わうはずだ。
そう、そのまま呼吸をゆっくり整えて。
その苦痛にあなたが堪えて、平常心を取り戻せれば、
私も少しは安らぎを得られる」

【10秒ほどゆっくりとした呼吸ください】
ウ「【深く深呼吸】……悪くない仕事です」

【ウェルナー、ヒロインから少し体をはなし、正面から見下ろす】
SE：離れる衣擦れ

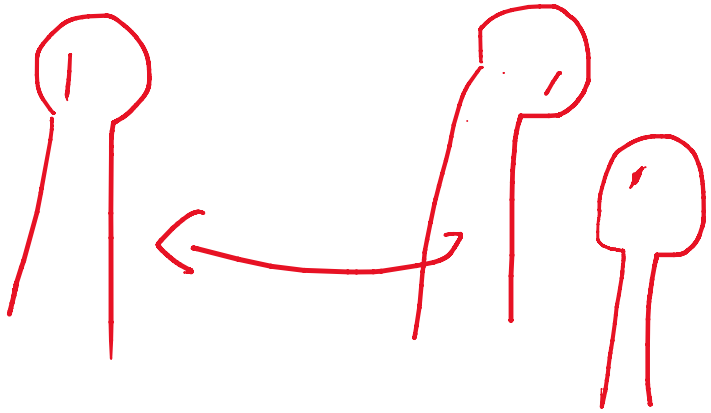
【1】
ウ「少しは使えるゴミ箱なようだ」

【ヒロイン「もう少しほかの呼び方になりませんか」】
ウ「っは……ほかの呼び方をしてほしければ、
今後も相応の努力をすることです」

【1→9　ヒロインに背を向けながら】
ウ「【軽くあくび】本日は下がって結構。
明日、同じ時間に部屋にくるように」

【ウェルナー、ヒロインに背を向け、ベッドに向かう】

SE：遠ざかる足音



## トラック２　噂話

食堂で旧友に声を掛けられ、上司がどれほどヤバイ存在かを聞かされているところを、ウェルナーに見つかる。

ＳＥ：食堂のざわめき

ＳＥ：食器カチャカチャ

ＳＥ：ヒロインの正面にトレーを置く

【コール、ヒロインの正面にトレーを置き、話しかけながら腰を下ろす】

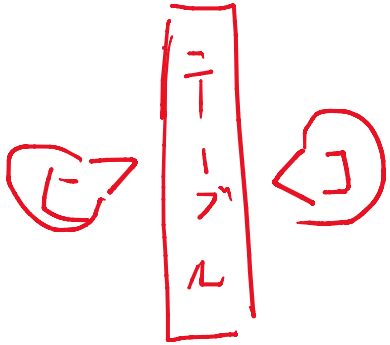
【９　机を挟んで正面】

コ「よう新人！　相席してもいいか？」

【ヒロイン「大丈夫ですよ」と答えて顔を上げ、知り合いがいたのでぎょっとする】

コ「あっはは！　やっぱりお前だったか。
　見たことある顔がいたからビックリしたわ」

ＳＥ：椅子に座る音




コ「調整機としての訓練終わったの、最近だろ？
　ここが初めての配属か？」

ＳＥ：頷く衣擦れ

コ「おまえが担当してる戦闘機って、ウェルナーさんだよな？
　もうメンテナンスしたのか？」

【ヒロイン「うん。ちょっと変わった性格の人だよね」】

【9】

コ「変わった性格……？
典型的なサイコパスだよ。
あの人は自分以外全員無能だと思ってるんだ。
他の戦闘機も、ウェルナーさんと組んで出撃するのを嫌がってる」

【ヒロイン「どうして？」】

コ「わかるだろ？
危険な局面で仲間を囮にするような人間と、
命をかけた戦闘に出撃したいか？　ってこと。
そりゃ、ドローン機での出撃だから、
撃墜されても即死ってわけじゃないけどさ……
戦闘機はドローン機と脳の深いところまで
感覚をリンクしてるんだ。
機体が壊れると脳にダメージが入る」

コ「俺、後方支援だからさ、
撃墜された戦闘機の面倒みることも多くて……
この前だって、ウェルナーさんが助けなかったせいで、
ドローン機の足を破壊された戦闘機がいるんだ。
その人は足が動かなくなって、リハビリのために医療基地行き。
ウェルナーさんはドローン機の四肢が吹き飛んでも
体に支障が出ないタイプだから、
負傷兵に対して〝欠陥品〟って吐き捨ててた」

【ヒロイン「それはひどいね」】

コ「ひどいねって……他人事じゃないだろ！
つまり、お前が担当してる戦闘機っていうのは、
そういう血も涙もないやつってこと！」

【9】

コ「あの人の担当になった調整機って、全員病院送りになってるんだ。
ここ一年は調整機なしでやってたのに、
なんで今になって突然……」

【ヒ「脳波チェックでレッドアラートが出てたって】

コ「レッドアラート？
それって発狂寸前の脳で出るやつだろ？
そんな状態だったら幻覚も幻聴も出てるはずだ。
アドレナリン垂れ流しで眠れなくなるし、
俺、レッドアラートの戦闘機見たことあるけど、
あんなに平然としてられるはずない。
ってか普通なら廃棄だよそんな戦闘機。
でもあの人は今日も出撃してる」

【突然、コールの背後（テーブルをはさんでヒロインの正面）に現れるウェルナー】

【9】

ウ「私はそこらの欠陥品とは脳の作りが違うんですよ。
加えて、私を廃棄すればこの基地が制圧されることを、
上層部は理解している」

【9　後ろを向いて】

コ「ウェルナー隊長！？　もう帰還なさってたんですか！？
珍しいですね、食堂にいらっしゃるなんて！」

ウ「ええ。私の大切な調整機に、
いらぬ陰口を吹き込む〝幻聴〟が聞こえたので」

コ「あの、いえ……その、俺……」

【9】

ウ「今も無能が馬鹿面を晒した〝幻覚〟が見える。
丁度、誤情報で要らぬ出撃を強いられて
イライラしてたところです。
敵の代わりに幻覚を殺せば気が晴れそうだ」

【ヒロイン、椅子から立ち上がる】

SE：急いで立つ音

ウ「なんです？　もの言いたげな顔で立ち上がって」

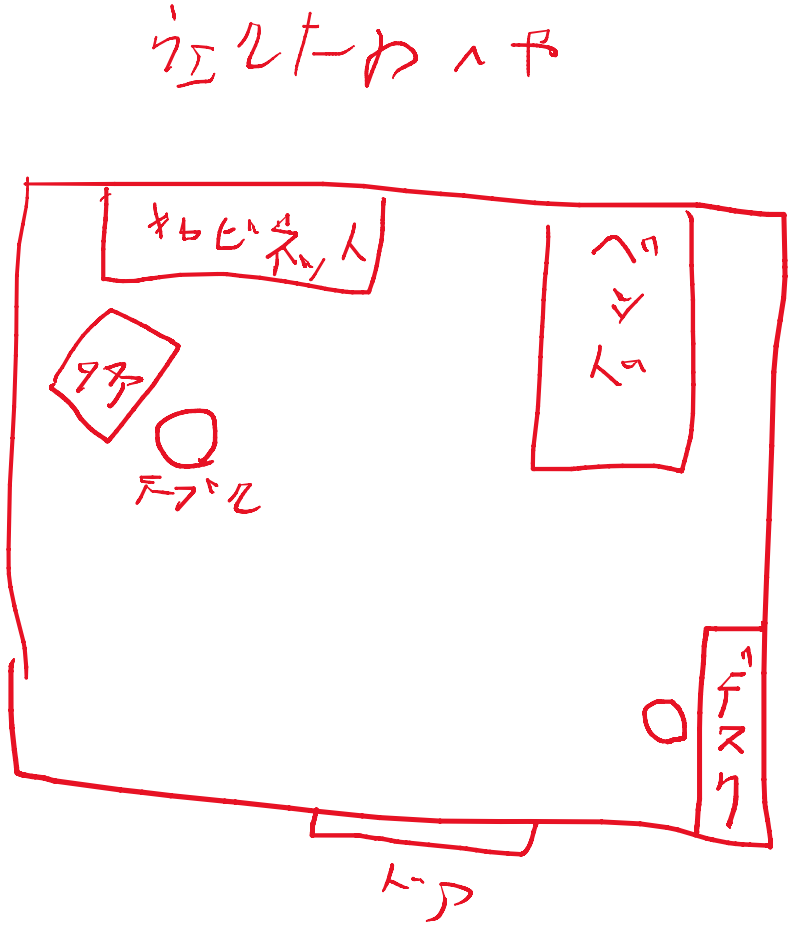
【ヒ「出撃なさったのなら、メンテナンスが必要では？」】

ウ「メンテナンス……ね。まあ、いいでしょう。
幻覚に果物ナイフを刺すよりはマシな気晴らしになりそうです」

【9　背を向けながら】

ウ「ついてきなさい」

「



# トラック3　教育

普通に昨夜と同じメンテナンスをすると思っていたヒロインだが、コールと仲良く談笑していた罰として「教育」と言う名目のもと強姦される。

SE：スライドドアが開く音
SE：足音二人分
SE：スライドドアが閉まる音

【ウェルナー、数歩歩いてキャビネットに向かい、ウィスキーの瓶からグラスに移す】

【9　ヒロインに背を向けて】
ウ「それで？　今日一日、私の悪評を聞いて回った感想は？」

SE：瓶を手に取る
SE：ウィスキーグラスに注ぐ
SE：瓶を置く

【ヒロイン「悪評を聞いてまわったわけでは」】

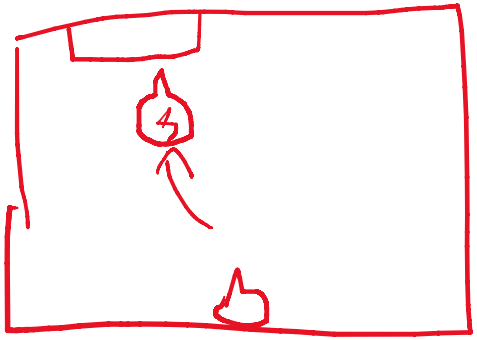
ウ「言い訳を聞いてるわけではありません。
　どう思ったかを聞いてるんです。」

【ヒロイン「わかりません」】

ウ「わからない？　【思い切り見下して】……っは」

【ウェルナー、ウィスキーを一口飲む】

【9　ヒロインに向き直り】
ウ「保身の見え透いた、面白みのない感想ですね。
　まあ、無理もない。
　調整機は戦闘機ありきの仕事です。
　私の機嫌を損ねるわけには……ねぇ？」



【ヒ「一年間調整機なしで過ごしたと聞きました」】

【9】

ウ「あぁ、そのことですか。
私があまりに調整機を壊すから、
反省を促そうとして調整機の補充を止めたんでしょう。
しかし私は態度を改めず、
結局私の発狂を恐れた上層部があなたを生贄に差し出した」

【ヒ「生贄って……」】

ウ「意味が分かりませんか？　では教えてあげましょう。
服を脱ぎなさい」

SE：驚く衣擦れ

【ヒロイン「どうしてでしょう？」】

ウ「いちいち理由を説明させる気ですか？
察する力のない無能は害悪です。
ああ、興がそがれた。
やはり、幻覚をいたぶって気晴らしをする方がよさそうですね」

【ウェルナー、ウィスキーを飲み干し、グラスを置いて歩き出そうとする】

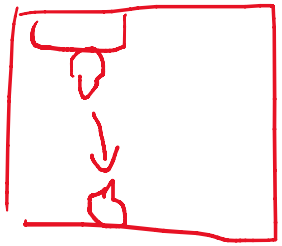
SE：グラスを置く
SE：足音数歩

【ヒロイン、慌ててウェルナーを引き留める（正面に立ちふさがる感じ）】

SE：強めの衣擦れ

【1】

ウ「何をしているんです？
部下が上官の前に立ちふさがって許されるとでも？」



【ヒロイン「服を脱げばいいんですか？」】

【1】

ウ「どうも、本当に立場が分かっていないようですね。
〝今から服を脱ぎますので、どうか見ていてください〟と
懇願するなら、付き合ってやらないでもない」

【ヒロイン、絶句する】

ウ「言えませんか？
では、そのつまらないプライドを守るといい。
明日、医務室に行けばその結果がわかるでしょう」

【ヒ「今から服を脱ぎますので、どうか見ていてください！」】

SE：強めの衣擦れ

ウ「あぁ、よく言えましたね。
よほどあの後方支援のガラクタが大事と見える。
しかし、先ほどあなたが私に言った言葉を、今あなたに返しましょう。
〝どうしてですか？〟
なぜ私があなたの懇願に応じて、
さして魅力的でもないあなたの裸体を見ないといけないんです？
他に楽しい娯楽があるというのに」

【うろたえて黙り込むヒロインの
耳元で、脅す様に低く囁くウェルナー】

【7　耳元】

ウ「友人を傷つけてほしくないのでしょう。
ならばほら、私を誘惑しなければ」

【ヒロイン「どうすればいいのかわかりません」】

【7　耳元】

ウ「男の誘惑の仕方がわからない？　本当に？
　授業では習いませんか。
　あなたのような若い女性の調整機にとって、
　戦闘機を手懐ける一番手っ取り早い方法だというのに」

ウ「興が乗ってきました。
　機嫌がいいので教えて差し上げましょう」

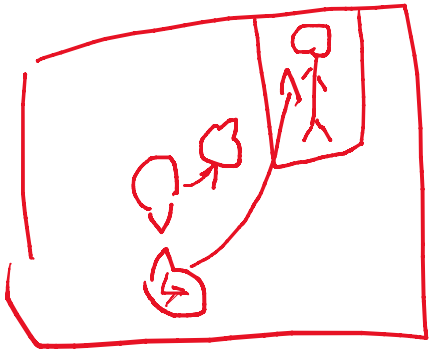
【ウェルナー、次のセリフを言いながらヒロインの腕をつかみ、ベッドに放り出す】

【7→9】

ウ「男の喜ばせ方というものをね」

SE：衣擦れ

SE：ベッドの軋み



【ウェルナー、仰向けに倒れ込んだヒロインに馬乗りになる】

【1　馬乗りで顔を覗き込む】

ウ「しぃ……しぃー。静かに。これはあなたに必要な教育です。
　抵抗することは許されない。」

ウ「服は自分で脱げますね？
　ナイフで裂かれて、裸で帰るのは嫌でしょう」

【ヒロインの服はジャンプスーツを想定。ファスナーをへそのところまで脱がすと靴ごと全部脱げる】

SE：ファスナーおろす

SE：両腕を抜く

【1　体起こして】

ウ「いい子ですね。下は私が脱がすのを手伝いましょう。
　腰を浮かせて、膝を曲げて。足をこちらに」

SE：下半身脱がす

SE：服を床に落とす

ウ「さて……せっかく服を脱いだというのに、
　なぜ体を隠してるんです？
　両手を頭の上にあげて交差しなさい」

【ヒロイン「でも」】

ウ「同じ命令を二度させる無能は嫌いなんですがね」

【ヒロイン、言われたとおりにする】

SE：衣擦れ

ウ「よろしい。そのまま――」

【ウェルナー、腰のベルトを引き抜き、ヒロインの両手をベッドのパイプに固定する】

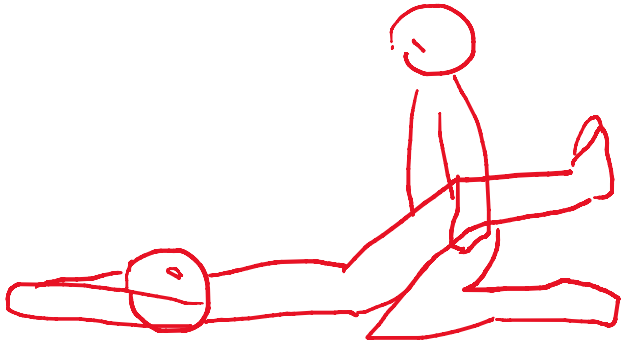
SE：ベルト外す

SE：ベルト引き抜く

SE：ベルトで腕を鉄パイプに固定

【ヒロイン「どうして拘束を？」】

ウ「拘束の理由など、
　それが必要だから以外にありますか？
　下手に暴れられても面倒ですから」



【ヒロイン「暴れたりしません」】

【1】

ウ「本当に、そう思っているんですか？
男に一度も触れられたことのない体を、
今から蹂躙されるというのに、
人形のようにおとなしくしていられると？」

【ウェルナー、ヒロインの胸をつかむ】

SE：鉄パイプの軋み

ウ「ほら、こうして軽く胸をつかまれただけで、
反射的に腕を動かそうとした。
乳房など、大して敏感な器官でもないというのに。
そのうえ、こうして乳首をつねったら？」

SE：鉄パイプの軋み

ウ「この通り、体が勝手に跳ねて、強すぎる感覚から逃げようとする」

【ヒロイン「やめてください」】

ウ「っは！　やめるわけがないでしょう。
まだ何も始まってすらいない。
自慰と似たようなものだと思っていましたか？
目をつむっていれば何も感じずに終わると？」

【ウェルナー、体を伏せてヒロインの耳元でささやく】

【3　耳元】

ウ「他人に与えられる快楽は、予想がつかず、制御ができず、
逃れられず、救いようがない。暴力と同じです」

【3　耳元】
ウ「ああ、そう……耳も敏感な性感帯だ。
私がこうして囁くだけで、勝手に体が跳ねるでしょう？
この耳の穴の奥に舌をねじ込み、
鼓膜を犯しながら胸を凌辱してあげましょう。
さっきの触り方は少し痛かったですか？
じゃあ、もう少し優しく、指の腹でこうやって」

SE：鉄パイプの軋み

ウ「懇願しても無駄ですよ。
私はやめない。
せいぜい、いい反応を見せて私を楽しませてください。
そうすれば、少しは早く終わるかもしれない」

【耳舐め30秒程度お願いします】

【3　耳を舐める合間にしゃべる】
ウ「あぁ、乳首が硬くなってきましたね。
充血して、もっと強くとねだるようだ」

【耳舐めここまで】

ウ「撫でられるだけではもどかしいでしょう。
望み通り、強くして差し上げますよ。こうして」

SE：鉄パイプの軋み

【1】
ウ「はは！　ははは！　なんて間抜けな声を出すんですか。
少し爪で引っ掻いただけでしょう？
ひとかきするたびにビクビク震えて、
乳首だけでオーガズムに達せられそうだ。

どうれ、試してみましょうか」
【ヒロイン「いや」】

【1】
ウ「あなたが嫌かどうかなんて、私には関係ない。
私がやると言ったら、従うのがあなたの仕事です」

【1→7】
ウ「本当に嫌なら、達するふりで私を騙せばいい。
うまく演技することですね。逆の耳も犯してあげますから」

【耳舐め1分程度お願いします】

SE：鉄パイプの軋み

【7】
ウ「おっと。今のは演技ですか？
まさか、本当にイったわけじゃないでしょうね。
処女のくせに、耳を舐められて乳首を軽く引っ掻かれただけで」

【1】
ウ「確かめてみましょう。両足を開いて、私の肩に乗せなさい」

【ヒロイン、怯えて従えない】

ウ「【うんざりしたため息】同じ命令を二度させるなと言ったでしょう。
ほら、こうして【ヒロインの両脚を肩に担ぎ上げる】」

SE：ベッドの軋み

ウ「これはこれは。思った以上に大洪水だ。
いつもなら、女の股を舐めるようなことはしませんが。
そんなに〝やってほしくなさそうな〟顔をされると、
やりたくなってくる。

命令に従えなかった罰です。さらなる屈辱を与えましょう」
【クンニ1分程度お願いします】
SE：鉄パイプの軋み
【立て続けにイかされてヒロインが泣き出したので、いったんやめるウェルナー】
【1　ヒロインの顔を見て】
ウ「まったく、娼婦のように下品にイったと思ったら、
子供みたいに泣き出して……」
【1　顔を近づけて】
ウ「これでも加減して差し上げてるんですがね。
過去に抱いた誰より丁寧に扱ってるくらいです。
イくまで舐めてやったうえ、こうして――」
SE：ベッドの軋み
SE：指を入れる水音
ウ「指でも丁寧にほぐしてやろうというんですから」
【ヒロイン、イったばかりのところを手マンされて半狂乱になる】
SE：鉄パイプ激しめに軋む
SE：指を出し入れする水音（激しめに
ウ「指を動かすたびに、こんなに溢れさせて……
私のベッドが台無しだ。
清掃の依頼を出す必要がありますね。
その際、あなたが汚したと報告しなければ」

【7　耳元】
ウ「聞こえるでしょう？　この音。
私が指を動かすたびに、ぐちゅぐちゅ、ぐちゃぐちゃ。
ほら、また勝手にイって私の指を締め付けている。
またイきそうなんですか？　だらしのないことだ。
少しは我慢したらどうです。
ほら、こらえなさい。
たとえ私が、こうしてクリトリスを押したとしても」
【ヒロインがイくと同時に、手マンを終えるウェルナー】
ＳＥ：ベッドの軋み
【1】
ウ「ふん……そろそろ頃合いか。
拘束をときます。
どうせその状態なら、碌な抵抗もできないでしょう」
ＳＥ：鉄パイプのベルト外す
ＳＥ：ベルトを床に落とす
【1】
ウ「腕を私の首に回して。
目を閉じ、愛しい男の幻覚でも追うといい【言い終わりで奥まで突っ込む】」
ＳＥ：挿入音
ＳＥ：肉を打つ音1回
ＳＥ：ベッドの軋み
【ヒロイン、入れられただけで派手にイく】

【7　抱き合う距離感】
ウ「っ……あぁ……さすがにキツいな。
いや、これは……まさかイってるんですか？
信じがたい淫乱ですね。なんて無様な。
今からそんな風では、
終わったときにはどうなっているやら」

ＳＥ：出し入れする水音
ＳＥ：肉を打つ音
ＳＥ：ベッドの軋み

ウ「【ガン突きしながら、とぎれとぎれに】あなたが
どんなに淫らに腰を揺らして、どんなに激しく締め付けても、
そう簡単には終わりませんよ。
レッドアラートが出るような壊れかけの脳は、
一度こうなると手が付けられない……！」

【吐息のみ１分程度お願いします】

【ヒロインが逃げようともがき始めたので、いったん抜いてヒロインをうつぶせに押さえつけるウェルナー】

ＳＥ：もがく衣擦れ
ＳＥ：水音ストップ
ＳＥ：抜く音

ウ「【舌打ち】腕は首の後ろに回せと言ったでしょう。
抱き合うよりも制圧されるのが好みなら、
望み通り――！」

【ウェルナー、ヒロインをベッドにうつぶせに押さえつけて密着寝バックの体位に】

SE：ベッドの軋み
SE：もがく衣擦れ
SE：強めのベッドの軋み
SE：押さえつける衣擦れ

【4】
ウ「こうしてうつぶせに押さえつければ、
　絶対に逃げ出せない」

【ヒロイン、必死に謝る】

ウ「胸に迫る謝罪です。
　よく覚えておくといい。
　そういう無様さが、男を強く誘惑する【言い終わりで挿入】」

SE：挿入音
SE：出し入れする水音
SE：肉を打つ音（寝バックなので派手めでも）
SE：ベッドの軋み

【吐息のみ1分程度お願いします】

ウ「はっはっは！　なんて声だ。
　さっきよりもずっと苦しいでしょう？
　腹の中の弱い粘膜の、すべてで私を感じるでしょう」

ウ「イってる？　だからなんです？
　ここでやめるはずがないでしょう」

【吐息のみ1分程度お願いします】

ウ「あぁ、あなたが無駄に締め付けるから、私も、そろそろ……！」

【ウェルナー、上半身を起こして普通の寝バックの体位に】

ＳＥ：出し入れＳＥ：ストップ
ＳＥ：体位変えるベッドの軋み

【余裕のない感じの吐息のみ１～２分程度長めにお願いします】

【５】
ウ「出る、もう……っく……！【歯を食いしばって声を押し殺す感じで終わらせる】」

ウ「【軽く深呼吸】思ったより楽しめました」

ＳＥ：抜く水音
ＳＥ：衣擦れ

【５→１５　背を向け、移動しながら】
ウ「私がシャワーから戻ったらメンテナンスをお願いします。
　身支度を整えて待機しているように。
　あぁ、そうそう」

【ウェルナー、ベッドから降りてシャワールームに歩いて行く】

ＳＥ：ベッドから降りる
ＳＥ：離れていく素足の足音

【１５　ヒロインを見て】
ウ「一度抱かれた程度で勘違いだけはしないように。
　これは単なる気晴らしで、
　あなたは依然として、私のたんなるゴミ箱です」

ＳＥ：スライドドア開閉

# トラック４　命名

トラック３の翌日、コールが心配して声をかけてくるが、まったく何も問題ないと答えるヒロイン。
そんなヒロインにウェルナーが慣習によって愛称を与える・

場所：廊下
時刻：昼

ＳＥ：廊下を走ってくる音

【１３】
コ「おーい！　あんた、ちょっと！
ちょ……識別番号ＦＣ－２７（ニーナナ）！」

【ヒロイン、自分が呼ばれてることに気づいて振り向く】
【コール、ヒロインの前で立ち止まる】

ＳＥ：足音ストップ

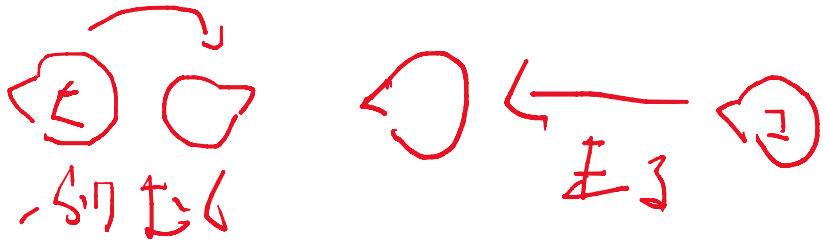
【９】
コ「昨日のこと気になってて、朝から探してたんだ。
【心配そうに】あの後どうだった？　何かひどい事とか……」

【ヒ「されてない」】

コ「そっか。ならよかった……けど……
なあ……あいつのメンテナンス、どうだった？
持ちこたえられそうか？」

【ヒロイン「ちょっと難しいけど大丈夫」】

コ「本当に？　ベテランの調整機でも、
初めてメンテナンスした日は医務室いきだったのに。
じゃあ、お前ってめちゃくちゃ優秀なのかも」



【ヒ「だといいけど」】

【9】

コ「いや、まじめな話。このまま一か月くらい働くと、
たぶん異動の辞令が出る。
ウェルナーさん相手で壊れない調整機なら、
上ももっと重要度の高い戦闘機と組ませたいから」

【ヒ「じゃあ、ウェルナーさんはどうなるの？」】

【1】

コ「あんなサイコパスが心配なのか？
一か月メンテナンスすればレッドアラートは消えるし、
また一年くらい調整機なしで任務をこなすさ」

コ「っていうか、ここだけの話。ちょっと耳貸して」

【7　耳元】

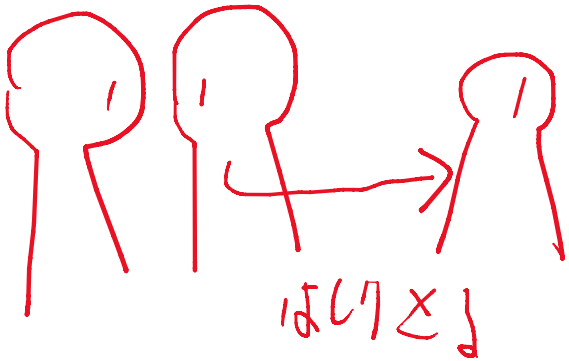
コ「ちょっと調べたんだけど、
上はウェルナーさんを廃棄する予定だったんだ。
レッドアラートが出てる戦闘機に新人の調整機を
あてがったら、普通は調整機が壊れるだろ？
そうしたら〝整備不能〟扱いで廃棄できる」

【ヒ「どうして？」】

コ「どうしてって……嫌われてるんだよ。わかるだろ」

【1】

コ「そういうわけだから、初めて担当する
戦闘機だからってあんまり入れ込むなよ。
なるはやで上層部に掛け合うから！
じゃあ今日はそれだけ、またな！」



SE：走り去る

【ヒロインが数歩歩いて曲がり角にさしかかると、そこにウェルナーが待っている】

SE：ヒロインの足音数歩

【15】

ウ「おしゃべりは終わりましたか？」

SE：驚く衣擦れ

【慌てて振り向いたヒロインを、壁に押さえつけるウェルナー】

SE：壁ドン

SE：衣擦れ

【1】

ウ「【少しイラついて】後方支援の連中は、
密談は人気のない場所でするという
基本的なことすら知らないようですね。
丸聞こえですよ。〝ニーナ〟」

【ヒ「ニーナ？」】

ウ「呼び名ですよ、あなたの。
調整機は名前を含むすべてのデータを秘匿されますから、
戦闘機が調整機の呼び名を決める慣習があるんです。
認識番号が27だからニーナでいいでしょう」

【ヒ「一か月で配置換えなのに？」】

ウ「ん？　ああ、その配置換えの話ですが……
まあ、概ね事実でしょう。しかし、一部間違っている」

【ヒ「どう間違ってるんですか？」】

【1】

ウ「私があなたの配置換えを拒否するということです。
私はこの基地のすべてを知っている。
どこを攻撃すればどう壊れるかを細かくね。
その私が、〝おもちゃを取り上げるパパはいらない〟
とダダをこねたら？」

【ヒ「上層部を脅すんですか？】

ウ「脅すだなんて、人聞きの悪い。交渉ですよ。
ただ私の機嫌を上手に取れたら、私は優秀な戦闘機であり続ける
残念でしたねぇ。私から逃げられると期待しましたか？」

【ヒ「私に興味がないかと思っていたので驚いています」】

ウ「【毒気を抜かれて】あ……なたに興味……が、
あるわけでは、ないですが……？
ただ私は、私の物が奪われることが我慢できない。
それだけです。
くれぐれも、勘違いをしないように」

【ヒロイン「肝に銘じます」】

【1→9　横を見ながら】

ウ「結構。では仕事です。
一年ぶりにメンテナンスを受けたせいで、
昨日の出撃で操作に若干違和感が出ていました。
今日はその調整をするために、あなたと
脳波をリンクした状態で機体に接続します」

【ヒロイン「訓練で習いませんでした」】

【11　隣を歩く距離】
ウ「訓練で？　【失笑】習うはずがないでしょう。
普通は戦闘機が一年間調整機なしで
活動することはありませんから」
【ヒロイン「ただ嫌われてるからという理由で、
命にかかわるような嫌がらせがありえるんでしょうか？」】
ウ「あの後方支援の言葉を鵜呑みにしたんですか？
純粋を通り越して幼稚で愚かだ。
嫌いだから、なんて理由で調整機を取り上げませんよ」
【ヒロイン「ならどうして」】
【9　ヒロインを見ずに】
ウ「私は隣国から恨まれているんですよ。
この基地を作るとき、
この一帯に根を張っていた害虫を殲滅した部隊で
唯一生き残っているのが私です。
今や、この一帯をうろついている害虫共の目的は、
レアメタルの盗掘ではなく
〝私を殺すこと〟と言った方がいい」
【ヒ「それなら、ウェルナーさんはこの基地から移動した方がいいのでは？」】
【9　ヒロインを見て】
ウ「誰にも教わらなかったんですか？
無能を晒すだけの愚かな発言ならしない方がマシだと。
この基地は、レアメタル採掘のために作られた。
そして、私がこの基地に居続ければ、
連中は盗掘よりも私の殺害に血道をあげる。
ハエトリガミとして便利なんですよ。私は」

【ヒ「だったらなおさら、死なれては困るのでは？」】

【9　ヒロインを見ずに】

ウ「それはいい質問です。
その通り。本来なら私に死なれては困るはず。
ですが……何かあるんでしょうね。
私が死ぬことで、上層部が得をする〝何か〟が。
まあ、立て続けに調整機を壊すような戦闘機です。
なんとなく退役するくらいなら、
限界まで働いて、なおかつ死んで役に立てということでしょう」

【ヒロイン「そんなのひどすぎる」】

【9　ヒロインを見て】

ウ「怒るんですか？　私のために？
あなたは……あー……私のメンテナンスの影響で
記憶障害が出てるわけではないですよね？」

【ヒロイン「どうしてですか？」】

ウ「昨晩の事を覚えていたら、もう少しあるべきでしょう。
怖がるとか、嫌がるとか。人間的な感情の動きが」

【ヒロイン「私がお役に立てていると思うと嬉しいです」】

ウ「う、嬉しい？　【ぼそっと】気色悪いな……
仕事の前に医務室で精神鑑定を受けるべきでは？」

【ヒロイン「正常だと思いますけど」】

ウ「正常な人間は、初対面の上官に強姦同然に
処女を奪われて〝お役に立ててうれしい〟とは言わないんですよ」

【9】
ウ「【深々とため息】まったく……いたぶりがいのない。
つまらない女ですね。退屈だ。
その緊張感のない気の抜けた間抜け面、見てるとイライラしてきます」
【ショックを受けるヒロイン】
ウ「【お、と言う感じで】あぁ、いいですねその顔。
そう、その顔だ。
ずっとそういう顔をしていなさい。
そうすれば、時々はご褒美をあげましょう」
【ヒ「ご褒美というと？」】
ウ「ん？　そうですねぇ……」
【3　耳元】
ウ「どんなご褒美だと思いますか？」
【慌てて飛びのくヒロイン】
SE：衣擦れ
【9】
ウ「ふ……ははは！　あぁ、今のは合格です。
とてもかわいらしいですよ。私のニーナ」

## トラック5　衝突

着任して二週間ほど経過。
何も問題なく過ごしていたが、ヒロインをウェルナーの担当から外す計画を邪魔されたことに気づいたコールがウェルナーにつっかかって敗北する

場所：廊下から食堂へ
時刻：昼頃

【ヒロインが食堂に向かうと、喧嘩の音が聞こえてくる】

ＳＥ：スライドドア開く
ＳＥ：食器がぶちまけられる

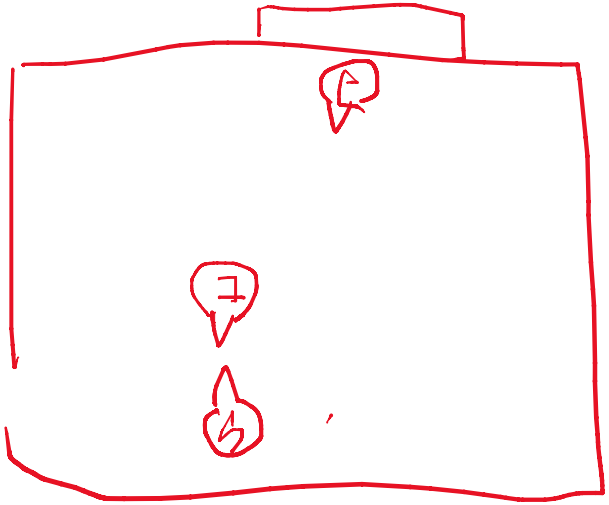
【コールに殴られ、ウェルナーが床に倒れている。】

【９】
コ「ふざけんな！　おまえが邪魔したんだろう！
　恥ずかしくないのか？
　新人の調整機の出世邪魔するようなことしてさぁ！」

【９　しゃがんで】
ウ「突然何を突っかかってきたのかと思えば、
　嫌がらせに失敗して八つ当たりの暴力ですか。
　私から調整機を取り上げたかったんでしょうが、
　戦果を挙げてる戦闘機から、
　相性のいい調整機を取り上げる言い訳が立つはずがないでしょう」

コ「何が相性だよ！　ＦＣ－２７が優秀なだけじゃないか！」

ウ「そうだったとして、
　この私に、優秀な調整機がふさわしくないと判断する
　理由はなんです？
　この基地の連中が、命の危機を感じずに
　過ごせている理由をご存じないんですか？」



【9】
コ「自分の手柄だとでも言いたいのか？
あんたなんて、廃棄寸前のレッドアラートじゃないか！
他の戦闘機を囮に使って戦果を挙げてるように
見せかけてるだけで、あんたなんて一人じゃ何も――！」

SE：緊急警報のアラート

コ「え……？　緊急警報！？　なんで突然！？
今まで一度も基地に襲撃なんてなかったのに……！」

【9　しゃがんで】
ウ「あぁ……最近多いんですよね。
ほかの戦闘機に休養を出しながら、私一人を巡回に出すような命令が。
本来なら二十分前に巡回に出ている予定でしたが……
【軽く笑って】思わぬトラブルで足止めを」

コ「笑ってる場合かよ！　早くコックピットに行けよ！
それがあんたの仕事だろ！？」

ウ「そうしたいのはやまやまですが、
なにせ、手ひどく顔を殴られた直後です。
【立ち上がりながら】私は負傷兵として
医務室に行かせてもらいますよ。
そのうち、休養中の戦闘機が出撃するでしょう」

【9】
コ「そんな……！」

【9】
ウ「その間に何人死ぬかわかりませんし、
私ありきで活動してたほかの戦闘機が、
どれだけ役に立つか知りませんがね」

SE：近づいてくる足音

【ウェルナー、食堂の入り口に突っ立っているヒロインの前に立つ】

【1】

ウ「ニーナ。ずっとそこで見ていたんですか？」

【ヒロイン「出撃なさらないんですか？」】

ウ「出撃？　しませんよ。
　そもそも、する必要がありませんから」

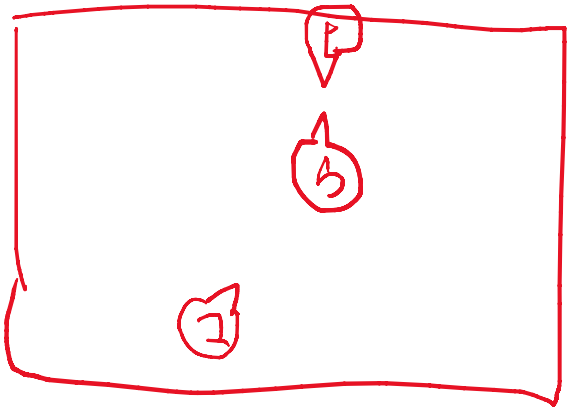
SE：アラートストップ

コ「とま……った？」

ウ「ふ……ふはは……あっははははは！
　しゅ、襲撃なんて、あるわけないじゃないですか！
　ここを襲ったら全滅することくらい、
　隣国の連中も分かってますよさすがに」

【ヒ「じゃあ、どうしてアラートが？」】

ウ「おおかた、私が〝いつもの時間〟に
　〝いつもの場所〟にいないから、
　愚かな害虫がセンサーの範囲まで侵入し、
　警報に怯えて撤退したというところでしょう」



【1】

ウ「あぁ、笑った笑った。
戦況も理解できていない後方支援の下っ端が、
隊長クラスの戦闘機に喧嘩を売っておいて、
アラートごときで真っ青になって震えだすとは。
【肩越しに後ろを見て】大丈夫ですか？
まさか漏らしてませんよねぇ？
識別番号ＦＲ－４３――コール通信補佐官殿」

【9】

コ「最低だよ、あんた」

【1　肩越しに後ろを見て】

ウ「あぁ、心地のいい負け犬の遠吠えです。
興奮さえ覚えますね。
無抵抗の戦闘機を一方的に殴りつけた処分が、
どう出るか楽しみだ」

【ヒ「彼に殴り返してください」】

ウ「【ヒロインを見て】……はぁ？
なぜあいつを殴ってやる必要が？
私だって殴る相手くらい選びます」

【ヒロイン、じっとウェルナーを見る】

ウ「【くそでかため息】面倒な……」

【ウェルナー、ヒロインに背を向けてコールに歩み寄り、一発殴る】

コ「なんだよ。まだ嫌味が言い足りない【殴られる】」

【9　ヒロインに背を向けて】
ウ「【殴る呼吸】」

SE：食器がぶちまけられる

ウ「彼女に感謝しなさい。
これで今回の一件は一方的な暴行沙汰ではなく、
些細な喧嘩という処理になる。
お互い、上司からの厳重注意を受けて解決です」

【ウェルナー、ヒロインの元にもどる】

SE：近づいてくる足音

【7　耳元】
ウ「ついてきなさい。私の楽しみを一つ奪ったんです。
当然、私を楽しませてくれるんでしょう？」

SE：スライドドアしまる
SE：足音二人分フェードアウト

## トラック6　信頼

ヒロインを連れて地下の拷問部屋に行くウェルナー。
まさかこんなところに連れてこられると思わず、うろたえて怯えるヒロインを拘束し、ありとあらゆる快楽責めでいたぶり倒す。

場所：拷問室
時刻：午後

SE：ロックを開ける電子音
SE：スライドドア開く
SE：二人分の足音
SE：背後でスライドドアしまる

【ウェルナー、部屋の中央に歩み出てヒロインに振りむく】

SE：遠ざかる足音5歩程度

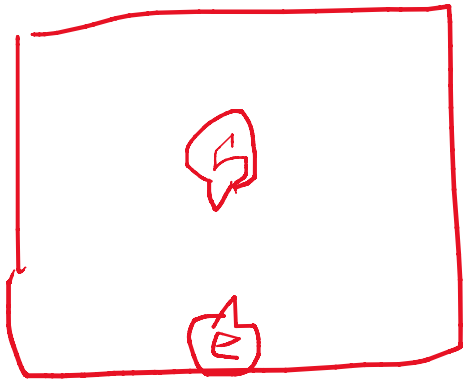
【9】
ウ「この部屋の用途は分かりますね？
　見ての通り、拷問用です。
　そしてこの天井から下がっている鎖は
　これに吊るした敵兵を袋叩きにするのに使われる。
【もったいぶって】今から、これにあなたを拘束します」

【驚くヒロイン】

ウ「何を驚いているんです？　はやくこちらへきなさい」

【ヒロイン、慌てて部屋を出ようとするが、ロックされているため開けられない】

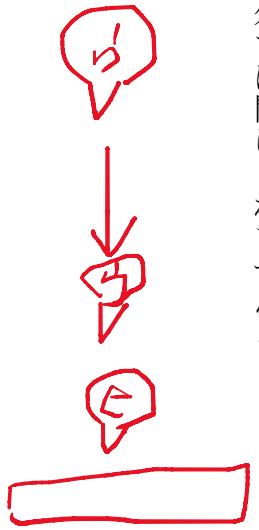
SE：衣擦れ
SE：ドアロックのビープ音



【ウェルナー、逃げようとするヒロインを見て「無様でかわいいな」と思いながら背後から歩み寄る】

【13→5】

ウ「そこのロックは隊長クラスの生体認証以外では開けられませんよ。
何か急用でも思い出しましたか？
まさか――」



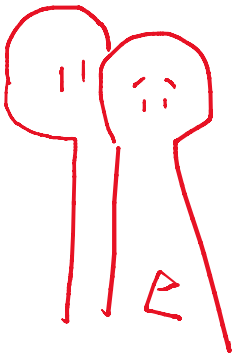
【ウェルナー、壁バンと叩く】

【6　耳元】

ウ「逃げようとしているわけじゃありませんよね？
この私から」

【ヒ「痛いのは嫌です」】

ウ「あのガキを殴れと私に指示しておいて、
自分は痛い思いをしたくないだなんて、
傲慢だとは思いませんか？」



【ヒ「あれは彼を守るためで」】

ウ「えぇ。わかってますとも。あなたは彼を守りたかった。
そのために、私を利用したんですよね。
彼は初日からあなたにやさしかった。
そこで、ある疑念が浮かんだんです。
もしかすると、私の大切な調整機は、
あの男に頼まれて私の脳に何か悪い悪戯をする気ではないかと」

【ヒ「そんなことありえません！」】

【6　耳元】

ウ「ありえないと、なぜ言えます？
　私には敵が多い。
　調整機が個人の情報を秘匿されるのは、
　家族を人質に取られた調整機の裏切りで
　命を落とす戦闘機が相次いだせいです。
　あなたが優しい旧友との色恋に傾倒し、
　私を陥れようとする可能性は十分に考えられる」

【ヒ「信じてくれないんですか？」】

ウ「信じる？　私は誰のことも信じませんよ。
　自分だけは特別だと思いましたか？
　思いあがるなと言ったでしょう」

ウ「それでも信じてほしいのなら、まずあなたが私を信じなければ。
　私のことを信じているなら、
　鎖に繋がれるくらい簡単なことでしょう？
　戦闘機が調整機にリンクを許可するということは、
　あれよりはるかに信頼を強制する行為だと思いませんか」

【ヒロイン、うなずく】

【6→1】

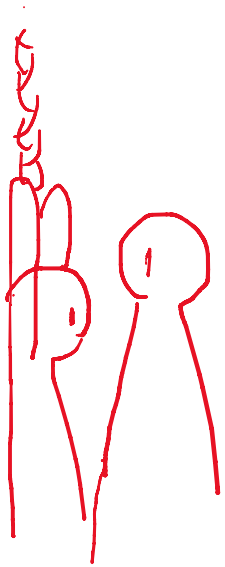
ウ「いい子だ。ではこちらへ」

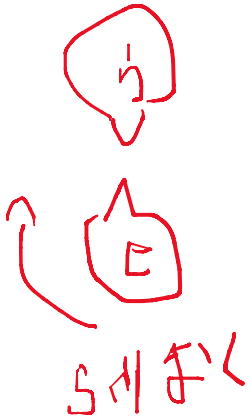
SE：方向転換する衣擦れ
SE：二人分の足音五歩

【1】

ウ「両腕を真っすぐ上げなさい。
　鎖の長さを調整します」

SE：鎖の音





【1】
ウ「もう少し肘を曲げて……そう、それでいい」
SE：手錠をかける音
【7】
ウ「震えていますね。
不安で呼吸が浅くなり、視線の位置は定まらず、
涙がにじんで、苦い唾液が口にあふれる。
あなたが初めて私の部屋に現れた日、こんな顔をしていました。
正直言って、興奮しましたよ。ズタズタにしてやりたかった」
ウ「あなたのような新人に、
私のメンテナンスなどできるはずがない。
そう思ったのに、あなたの仕事は完璧でした。
私の脳とリンクして、負荷に耐えきれずに
泣きわめいて壊れるところを見たかったのに」
ウ「ねぇ、ニーナ。
私にあなたが壊れるところを見せてくれますか？
悲鳴と懇願しか口にできなくなったあなたが、
私に何を言うのか知りたいんです。
苦し紛れにどんな嘘をつくのか、
どれほど必死に私に愛を叫ぶのか」
【ウェルナー、ヒロインの服のファスナーをおろす】
SE：ファスナー下げる音
ウ「【ひそひそ囁く】そこで待っていてください。
この部屋には、女性を壊すためのおもちゃが
数えきれないほどあるんです」

SE：足音7から13へ

SE：引き出しを開けて瓶を取り出す

【13　ヒロインを見ずに】

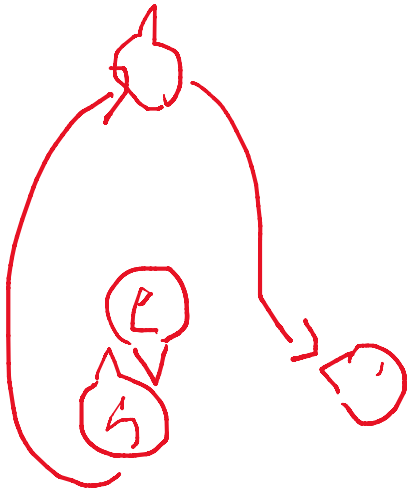
ウ「私も初めてこの部屋の設備を見た時は、
あまりの悪趣味さに笑いましたよ。
ほとんど司令官のゲスい冗談で、
ここに女性の捕虜が連れてこられたことは
ないので使われたことはありませんが……」

SE：足音11へ移動

SE：引き出しを開けてローター出す

【11】

ウ「今日、あなたに使われることで
道具たちも浮かばれる」



## トラック7　懲罰

トラック6の続き。
様々なおもちゃでヒロインを快楽責めする。

【4　背後から耳元へ】

ウ「まずはこれで、軽く緊張をほぐしましょうか」

SE：スイッチ入れる
SE：振動音

ウ「見なくても、音でなんだかわかりますよね？」

SE：スイッチオフ

ウ「こういうオモチャの開発者の異常ともいうべき欲望と探求心には
脱帽することしきりです。
こうやって胸に押し付けて、少し体温で温めてやると」

SE：スライム系のねっとり音

ウ「乳首にがっちり食いついて、
どうもがいてもはずれない」

SE：スイッチ入れる
SE：振動音
SE：鎖じゃらじゃら

ウ「ああよかった。
気に入ってくれたようですね。
次のおもちゃは少し珍しいですよ。
拷問用に開発されたものなので、
〝苦痛に感じる快楽〟を与えることに特化している。
当然、一番強い性感帯に使います」

SE：瓶のふた開ける
SE：触手系のじゅるじゅる音

【4】

ウ「見えますか？　小さなヒトデみたいでしょう？
裏側にびっしりとはえたこの触手で
クリトリスに絡みつき、ありとあらゆる刺激を与え、
尿道の中まで入り込んで快楽を引きずり出す。
これを使われて泣き出さない女はいないと言います。
誰もが十分もたずに屈服する。
あなたは何分持つでしょうねぇ」

SE：触手系のじゅるじゅる音
SE：鎖がちゃがちゃ

ウ「ほら、もう食いついた。
繊細な触手がクリトリスの皮をむいて、
小さな足でつつきまわすのがわかりますか？
長めの触手がまきついて、強く、
弱く絶え間なく締め上げてくるでしょう」

ウ「けど、まだイくのは我慢した方がいい。
一度イったらさらに辛くなりますから」

【ヒロイン「外してください」と泣き叫ぶ】

ウ「外しませんよ。まだ1分も経ってない。
ほら、歯を食いしばって。
我慢ですよ、我慢我慢。
少しでも気が散らせるように、
手伝ってあげましょうね。
あー、ん【言いながら耳舐める】」

【1分程度耳舐め】

SE：鎖が跳ねる

【4】

ウ「あーあ。我慢できませんでしたか。
　イったら辛いと教えておいたのに」

SE：鎖激しくがちゃがちゃ

ウ「しぃ、しぃー。暴れないで。手首に傷がつきます。
　辛いですか？　暴力的な絶頂に、脳が破壊されるようでしょう。
　かわいそうに。逆の耳も舐めてあげましょうね」

【7】

ウ「耳の穴の奥まで、舌で犯してあげますから」

【1分程度耳舐め】

【ヒロイン、必死に謝り始める】

ウ「んんー？　何を謝ってるんです？
　謝るような悪い事したんですか。
　やはり拷問にかけて正解でした。
　何を隠しているのか、徹底的に聞き出さなくては」

【ヒロイン「何も隠してないです許してください」】

ウ「許しませんよ。許すはずがない。
　あーあ、制服をそんなによごして……
　もう使い物になりませんね。切ってしまいましょう」

SE：ジャックナイフパチン

SE：帆布系の布を切り裂く

SE：布が床に落ちる

【7】
ウ「おやおや。足首までべっとり濡らして。
　これはふたをしないといけませんね」

【5】
ウ「ああ、そうだ。
　確かさっきの引き出しに……」

SE：足音5→11
SE：引き出しを開ける
SE：バイブ取り出す
SE：足音11→1

【1】
ウ「ほら、ありましたよ。冗談みたいなバイブ。
　二股に分かれてて尻の穴まで責められる」

【ヒロイン「嫌ですやめてくださいお願いします」】

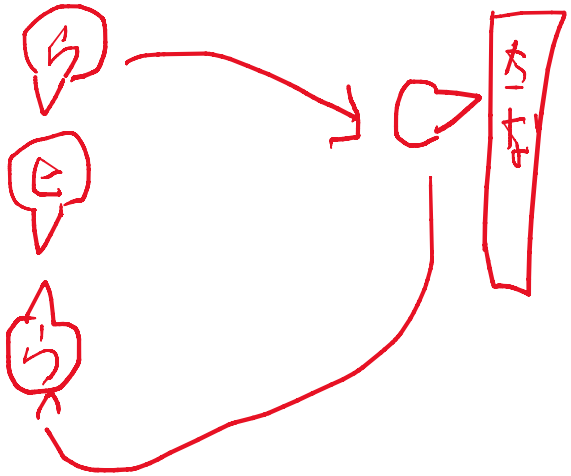
ウ「そうですねぇ、嫌ですねぇ。
　でも、あなたが悪いんですよ。
　隠していることを白状しないのだから。
　ほら、足をあげて。奥まで一気に入れますよ」

【ウェルナー、ヒロインの足をあげさせてバイブを押し込む】

SE：奥まで挿入する水音
SE：鎖がちゃがちゃ

ウ「このまま足を閉じて、ベルトで縛ると――」

SE：ベルトで固定する音



【1】
ウ「どうです？　足をぴったり閉じてると、
子宮口まで詰まったバイブを、
イくたびに膣がぎゅうぎゅう締め付けて、
形がはっきりわかるでしょう？
この状態で最強までスイッチを入れると……」

SE：スイッチオン
SE：スイング系のバイブ音

【ヒロイン、悲鳴を上げてもがく】

ウ「あっはははは！　すごい声ですね。
ブタが鳴いてるのかと思いましたよ。
ひぎぃ、うぎぃ、って。
人間て、殴られたとき以外にもそんな声が出るんですねぇ」

【3】
ウ「強制的に与えられ続ける絶頂で、
限界まで敏感になった柔らかな肉の壁を、
イボだらけのバイブでえぐられる気分はどうです？
尻の穴にまで異物を押し込まれて、
涎垂らしながら悶絶する感想は？」

【ヒロイン、答えられない】

ウ「返事がありませんね。答えられないんですか？
この私が聞いているというのに。
本当に、反抗的な女です……ね！【尻叩く】」

SE：強めのスパンキング音
SE：鎖がちゃがちゃ

【7】

ウ「なんですか、今の声は。
　これ以上イけないくらいだと言うのに、
　叩かれてまたイったんですか？」

【ヒロイン、ずっと謝ってる】

ウ「謝っているだけじゃわからないでしょう。
　質問に答えなさい」

ＳＥ：強めのスパンキング音

ウ「ん？　何？
　聞き取れませんよ、もう一度」

ＳＥ：強めのスパンキング音
ＳＥ：鎖の軋みストップ

【ヒロインが失神する】

【1】

ウ「ニーナ？　あぁ、失神したのか……」

ＳＥ：スイッチオフバイブ
ＳＥ：スイッチオフローター

ウ「ほら、仕事は終わりだ。瓶に戻れ」

ＳＥ：触手系のじゅるじゅる音
ＳＥ：瓶に戻す
ＳＥ：瓶の蓋閉める

【1】
ウ「【優しく】ひどい顔ですね。
よだれと涙と鼻水とでぐちゃぐちゃだ。
ニーナ、起きなさい。いつまで寝てるつもりですか」
SE：頬ぺチペチたたく
SE：意識を取り戻して鎖が鳴る
【ヒロイン、必死になってウェルナーに許しと助けをこう】
ウ「しぃ、しぃー。少し落ち着きなさい。
もうしませんよ。拷問ごっこは終わりです」
【ヒ「拷問ごっこ？」】
ウ「ええ。あなたが誰かと共謀して私を陥れるなんて
本気で私が考えてると思いましたか？
私は自分の敵を見つけるのはうまいんです」
【ヒ「じゃあどうしてこんなひどいことを！」】
ウ「ひどいこと？
あなたも楽しんでいたじゃないですか」
【ウェルナー、ヒロインの足のベルト外してバイブ引き抜く】
SE：足の拘束ベルト外す
SE：バイブ引き抜く
SE：引き抜く水音
ウ「ほら、こんなにべっとり汚して。
これももう廃棄でしょうね」
SE：バイブ床に落とす

【1】
ウ「なんですか、その顔は。
　さっきまで助けて許してと泣きわめいていたくせに。
　少し優しくすると、すぐつけ上げって。
　どうやらまだ躾が足りないようだ」

【3　耳元】
ウ「オモチャで遊ぶだけじゃ退屈でしたか？
　やはり本物で犯されなければ物足りない？」

SE：ズボンのファスナーおろす
SE：鎖がちゃがちゃ

ウ「そんなにはしゃがなくても、
　望み通りに犯してあげますよ」

SE：挿入音

ウ「ッ……！　っはは……！　なんて締め付けだ。
　いれただけでイったんですね。
　もう、どこをどう触られても
　イくのが止められないんでしょう」

【ヒロイン「違います」】

ウ「何が違うんです？
　強がるなら、馬鹿みたいにイキ狂うのを
　我慢できてからにするんですね。
【ここからガン突き】ほら、ほら、ほら！」

【吐息のみ30秒程度】

SE：出し入れの水音
SE：肉を打つ音
SE：鎖がちゃがちゃ

【3　耳元】
ウ「【ガン突きしながら】これでもイってないんですよね？物足りないくらいですか？そういえば、乳首のローター、まだつけたままでしたね。ほら、スイッチ」

SE：振動音

ウ「っはっは！　締まる締まる……！死ぬ寸前の痙攣みたいじゃないですか。奥を突かれるのが堪えられませんか？バイブはこんな風に、子宮の奥まで殴ってくれませんでしたもんねぇ」

【吐息のみ1分～長めにください】

ウ「あぁ、耳元でぎゃあぎゃあとやかましい。感謝しなさい。口も犯してあげますから」

【支配を感じさせる、苦しげなキスハメ1分程度で、やりよいタイミングで射精までつなげてください】

SE：鎖の音ストップ

【1】
ウ「はぁ……はぁ……ふ～～～……」

SE：スイッチオフ
SE：振動音ストップ

ウ「よしよし、よく頑張りましたね。
辛かった、辛かった。
あとは全部私に任せて、そのまま眠ってしまいなさい。
これで終わりです。これで全部終わり。
さよなら、私の最後の調整機」

## トラック８　出撃

自室で目を覚ましたヒロインは、習慣でその日の予定に目を通すと、ウェルナーの出撃予定が目に入る。
「機材不調のため、ドローン機に直接搭乗」というほぼ「死んで来い」と同義語の任務に向かうことを知ったヒロインは、慌ててウェルナーの元に向かって走る。

SE：ヒロインの足音

【ヒロイン、廊下でコールを見つけて走り寄る】

SE：走る音

【１　向き合う距離】
コ「よう、ＦＣ－２７。どうした？　そんなに急いで」
【ヒロイン「ウェルナーさん知らない？」】
コ「ウェルナー？　さっきドックにいたけど。
　あ、ちょっと待った！」
【ありがとう、と答えて走り去ろうとするヒロインの腕をつかんで引き留めるコール】

SE：腕つかむ衣擦れ

コ「あの人に出た命令書読んだだろ？
　通信機材不調のため、ドローン機に直接搭乗。
　今回の出撃は遠隔じゃない。
　行っても調整機は出る幕ないと思うよ」
【ヒロイン「直接搭乗なんて危険すぎる」】

コ「危険でも仕方ないだろ。そういう仕事だ。
可哀そうに。
自分のドローン機の通信装置だけが壊れるなんて。
まあ、日頃の行いが悪いっていうか。
【吐き捨てるように】自業自得だろ」

コ「だってそうだろ？
普通なら〝修理が終わるまで待機〟になるところを、
〝直接搭乗して出撃〟だぜ？
戦死してくれれば廃棄の手間が省けるって、
言われてるようなもん【ひっぱたかれる】」

SE：叩く音

コ「なんだよ！　お前だってあんな奴、
死んでくれた方が助かるだろ！？
本人だって気づいてるはずだ。
上層部に戦死を望まれてるってことくらい！」

【ヒロイン、コールに背を向けて走り出す】

【13】
コ「あ、おい！」

SE：急いで走る音フェードアウト

【ドローン機のドックに急いで向かうヒロイン】

SE：急いで走る音フェードイン
SE：スライドドア開く

【ドックに飛び込むと、ウェルナーが搭乗の最終調整をしている】

【ヒロイン、ウェルナーの名前を呼んでその胸の中に飛び込む】

【9】

ウ「ニーナ？　どうして【抱き着かれる】――っと！」

SE：走る

SE：抱き着く衣擦れ

【1】

ウ「あれだけ痛めつけられて、よく目を覚ませましたね。
怪物並みの体力だな」

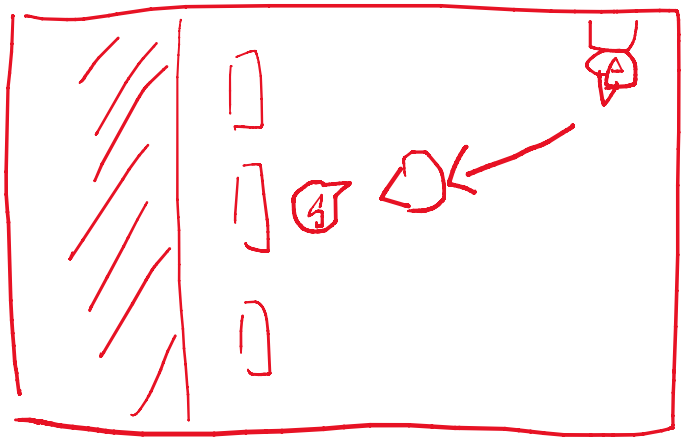
【ヒ「ドローン機に直接搭乗ってなんですか？」】

ウ「別に、直接搭乗くらい大騒ぎすることでもないでしょう。
緊急時にはままあることですし、
私が訓練学校に入った十五年前は遠隔システムすらなかった。
これで死んだとしても、それまでの事です」

ウ「私もあなたと同じ、しょせん使い捨てですよ。
大方、私を差し出せばこの一帯の採掘権を
正式に認める取引でも持ち掛けられて、
上層部が飲んだんでしょう。
調整機を受け付けない、欠陥品の戦闘機の
処分方法としては賢い選択だ」

【ヒロイン「今は私がいます」】

ウ「まるで、私に死んでほしくないような口ぶりですね。
あなたがすることは部屋に戻って、膝を抱えて震えて祈ることですよ。
どうか、あのクズが戦死して解放されますようにと【ここでヒロイン
にキスされる】」



【ディープキス３０秒ほどお願いします】

【１】

ウ「あぁ……時間です。
　さぁ、もう戻りなさい」

【１　背を向けながら】

ウ「今のキスの意味は、
　帰還してからゆっくり聞くとしましょう」

ＳＥ：遠ざかる足音

## トラック９　帰還

任務で雑に死ぬ予定だったが、ヒロインが帰還を待っているので任務を遂行し、帰還したウェルナー。
しかし割とボロボロで医務室に運ばれているので、ヒロインがウェルナーをねぎらうと意気込むエロトラック。

場所：医務室
時刻：夜

【夜、医務室でふと目覚めるとベッドサイドにヒロインがいるので少し驚くウェルナー】

【９】
ウ「【寝起き】ん……うぅん……」

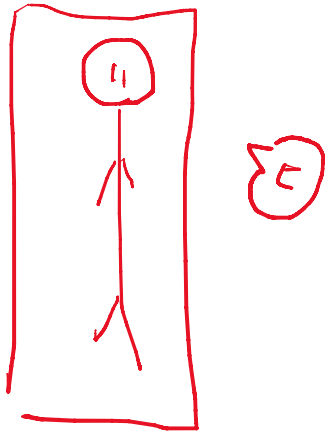
【ヒ「目が覚めましたか？」】

ウ「ニーナ？　どうしてあなたが医務室に？」

【ヒ「心配で」】

ウ「心配されるようなことは何もありませんよ。
私が隣国の害虫相手に後れをとるはずがないでしょう。
どういうわけか、私が直接搭乗しているのを知っていて、
やたらコックピットばかりを狙ってきましたが、
動きが単調になって逆にやりやすかったくらいです。
機体が一部損傷していたので、念のための検査措置ですよ」

【ヒ「足が動かないって」】



【9】

ウ「【舌打ち】誰がそんな余計なことを……
機体損傷個所の感覚マヒは、
直接搭乗の避けられない副作用です。
一晩寝れば回復するもので……
今時の調整機はそんなことも習わないんですか？」

【ヒ「習います」】

ウ「習っているなら、何をそんなに心配してるんです」

【ヒ「ウェルナーさんが殺されないか心配で」】

ウ「殺される……？　私が……？
……あぁ。なるほど。
確かに、今なら簡単に暗殺できるでしょうね。
……で、あなたはそれを心配して、私を守るためにずっとそこに？」

【ヒロイン、うなずく】

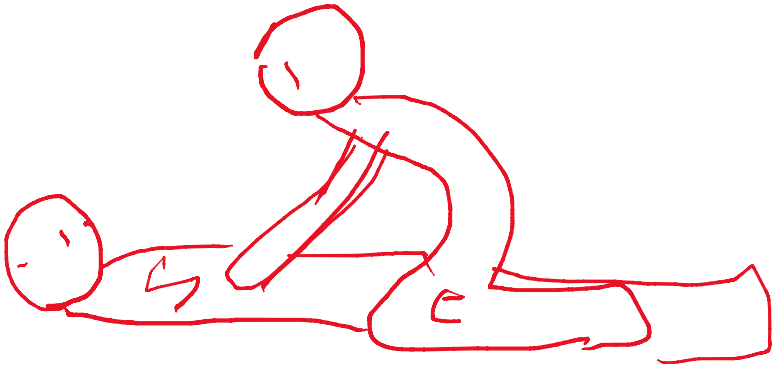
ウ「は、はは……っははははは！
あっはっはははははは！
はーっはははは！」

【ヒ「どうして笑うんですか！」】

ウ「あぁ、いえすみません。
守っていただいて光栄の至りですよ。
なんとお礼を申し上げたら」

【ヒロイン、怒ってウェルナーに馬乗りになる】

ＳＥ：椅子から立ち上がる



【9】

ウ「おや、お帰りですか？　もう私を守る任務は必要ない？
　って……ちょ、何をやって……！」

SE：ベッドが軋む

ウ「こ、こら！　負傷兵に馬乗りになるやつがありますか！」

【ヒ「私が暗殺者かもしれません」】

ウ「はぁ……なるほど。
　あなたが暗殺者の可能性ですか。
　考えもしませんでしたが、興味深い。
　どうやって私を殺すつもりです？
　どうせ殺すなら、いたぶってからにするといい。
　ちょうど、検査直後なので全裸ですし。
　案外いい声で鳴くかもしれません。試してみては？」

【ヒロイン、知識がなさ過ぎて何もできない】

ウ「何を固まってるんです？
　早く〝何か〟してくださいよ。
　私はもう、期待でギンギンになってるんですから」

【ヒロイン、悩んだ末にフェラを決意する】

SE：ベッドの軋み
SE：衣擦れ

【椅子に立つ】

ウ「しゃぶってくださるんですか？
　これは楽しみだ。
　やり方は知ってるんでしょうね。
　くれぐれも、歯は立てないでくださいよ」

【ヒロイン、ムカついていきなりくわえ込む】

【9】

ウ「ぅわ……？！

うっ……く……！

なるほど、知ってはいるんですね」

SE：フェラ音（ゆっくり）

ウ「あぁ……はっ……んん……

【優しく】はは……へたくそが。

それじゃあ全然足りませんよ。

もっと舌を絡めて、唇をすぼめて……

あぁ、そう、ずっとよくなった」

【1分程度穏やかな吐息お願いします】

ウ「それで？　次の一手はなんです？

このくらいでは、

まだ私の鳴き声は引き出せませんよ」

SE：フェラストップ

【ヒロイン、スカートをまくり上げ、ウェルナーの下半身を隠す】

SE：衣擦れ

ウ「珍しい。今日はスカートなんですね。

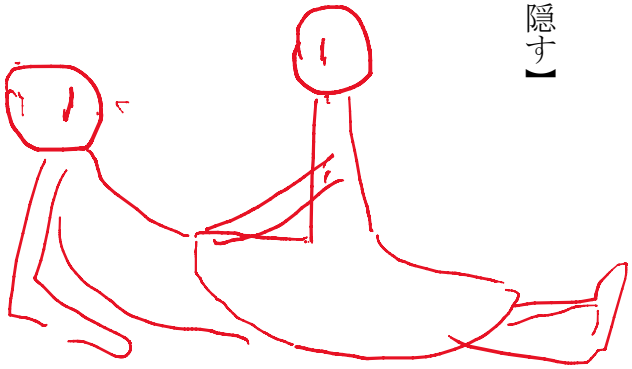
最初から、こうして私を襲う気だったんですか？」

【9】

ウ「そうして視覚的に自分の体を隠されると、

予想がつかなくて感覚が鋭敏になる。

拷問の手法です。よくご存じだ」



【ヒロイン、ウェルナーにまたがって素股】

SE：触れる水音
SE：素股ゆっくり

【9】
ウ「ぅぁ……！
　そんなふうにいきなり確信に触れるような真似、
　少々品がないのでは？
　ん、あぁ……くそ、浅いところで……
　焦らしているつもりですか？」

【1分ほどじれったそうな吐息ください】

ウ「ん、く……！
　いつまでそうしてるつもりです？
　私が入れさせてくださいと懇願するとでも？」

【ヒ「しませんか？】

ウ「しませんよ、懇願なんて。
　いれたくなったら、そうするだけです」

ウ「こうやって、逃げられないように
　あなたの腰をしっかりとつかんで。
　そうら！」

SE：奥まで貫く水音

ウ「足が動かないだけで、
　私が抵抗できないと思ったんですか？
　浅はかな暗殺者は、どうされると思います？
　返り討ちにされるんですよ」

SE：ベッドの軋み
SE：出し入れする水音
SE：肉を打つ音

【吐息のみ３０秒程度お願いします】

【ヒロインがイったのでいったん止めるウェルナー】

【９】

ウ「っく……！　あぁ、もうイッたんですか？
とんでもないザコですね。少しも快楽に抗えない。
謝罪しなさい。
〝簡単にイキ狂う雑魚まんこで申し訳ありません〟と」

【ヒロイン、謝る】

ウ「呆れた。あなたにプライドはないんですか？
少しは抵抗したらどうです。
なんですか、その物欲しそうな目は。
医務室に運ばれた上官にまたがって、
自分の快楽のために腰を振れと言うんですか？」

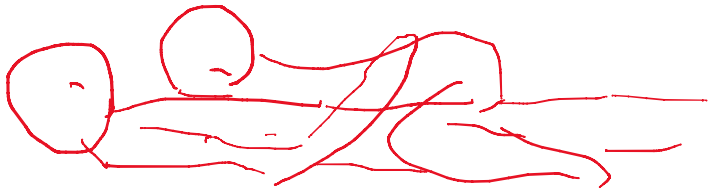
【セリフの区切りごとに突きあげる】

ウ「少しは！　自分が！
奉仕する努力くらいしたらどうですか！」

SE：強く突く音３回

【ヒロイン、ウェルナーの体に倒れ込む】

SE：倒れる衣擦れ



【1】
ウ「まったく、あなたに期待した私が愚かでしたよ。
そこで勝手にへばっていなさい。
私はあなたを道具として使いますから。
あなたは何もしなくても、具合だけはいい穴だ。
そこだけは褒めてあげましょう」

【遠慮のない吐息1分程度】

ウ「腰を逃がそうとするんじゃありません【ヒロインの尻叩く】」

SE：叩く

【1】
ウ「仕方ありませんね。よっと……！」

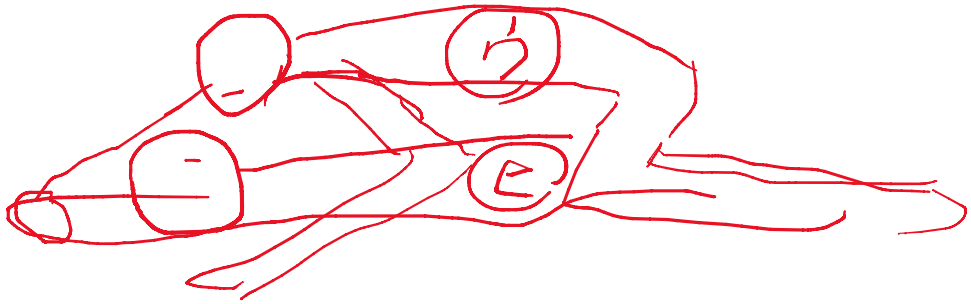
【ウェルナー、ヒロインをベッドに押し倒して自分が上になる】

SE：ベッドの軋み
SE：衣擦れ

ウ「何を驚いてるんです？
膝から上は動くんですから、
自分より軽い女を組み敷くくらいできますよ。
考えもしませんでしたか。
本当に、あなたと言う女は」

【3　耳元】
ウ「短慮で愚かで、哀れなほど愛おしい」

【3　耳元で吐息のみ30秒程度ください】



【3　耳元】
ウ「さすがに、声が大きすぎますよ。
　見回りに見られたいんですか？」

【1】
ウ「ほら、口を開けて。ふさいであげますから」
【1　キスハメ吐息のみ2分程度長々ください】

【1】
ウ「あぁ、出る……中に出しますよ……！
　ありがたく飲み干しなさい……！【射精】」

ウ「【しばし呼吸を整える】ふ、はは……ははは……！
　あなたという女は本当に……
　こんな扱いをされてどうしてそう、とろけた顔ができるんです？」

【ヒ「好きなので」】

ウ「そうですか……。
　私を好きだと言う人間など、世界であなたくらいでしょうね」

【3　耳元】
ウ「だから、あなたは一生私の物です。
　いいですね？
　私がいずれ、どこかで死ぬその日まで、
　ずっと私に苦しめられて生きるといい」